



Title	<書評>Achille Mbembe, Translated by Steaven Corcra, Necropolitics
Author(s)	雪丸, 温翔
Citation	共生学ジャーナル. 2025, 9, p. 228-234
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/102008">https://doi.org/10.18910/102008</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 書評

Achille Mbembe, Translated by Steaven Corcra

*Necropolitics*

Duke University press、2019年、213頁

雪丸温翔\*

## 1. はじめに

本稿はアシル・ムベンベ（1957-）による著作である *Necropolitics* についての書評論文である。英語版の本書に先んじて、*politiques de l'inimitié* と題された仏語版が 2016 年に出版されているが、本稿では英語版を用いている<sup>(1)</sup>。著者のアシル・ムベンベは現在、南アフリカ共和国のウィットウォータースランド大学の教授を務めており、専門はアフリカを中心とする思想だけでなく、ドイツやフランスなどの西洋思想、歴史、政治など非常に幅が広い。2024 年には人文科学、社会科学、法学、神学の分野で優れた研究者に贈られるボルヘア賞を受賞しており、近年、多くの注目を集めている思想家である。2024 年 9 月現在、ムベンベの著書は日本でもいくつかの邦訳が進んでおり、「黒人理性批判（原題：*Critique de la raison nègre* (2013)）は 2024 年 11 月 14 日に出版が決定している。邦訳予定は今のところ見られないものの、*Sortir de la grande nuit – Essai sur l'Afrique décolonisée* (2010) や *Brutalisme* (2020) などの著作もある。

本書は現代における惑星規模の敵対関係に関する考察と、そうした状況の改善を目指した著作である。本書において登場する「死政治（necropolitics）」という用語はその中で用いられる概念の一つに過ぎない。この用語が重要であることは間違いないが、日本においては、その用語だけが一人歩きしてしまっている状況がある。日本にはじめてムベンベの思想がもたらされたのは 2005 年に東京外国语大学の海外事情研究所で発行されている学術雑誌『クアドランテ』で掲載された「ネクロポリティクス—死の政治学」（本書第 3 章）であった。その後、しばらく期間が空き、2019 年にロージ・ブライドバッティによる『ポスト・ヒューマン』やディネシュ・ワディウェルによる『現代思想からの動物論』など、ムベンベへの言及がなされている書籍が

\* 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程；u805932j@ecs.osaka-u.ac.jp

邦訳されたが、その多くは「死政治」に焦点をあてたものばかりであった。こうした事情から、本稿では「死政治」という語はできるだけ用いずに本書を紹介することで、ムベンベの主張を確認する。

## 2. 本書の概要<sup>(2)</sup>

本書は序論と結論のほか、6章で構成されている。とはいっても、連続的なものではなく、所々で議論はパラレルに行われている(p.1)。そのため、それぞれ独立した一つの論文として読むことができる。

第1章「民主主義からの脱出(Exit from Democracy)」では、民主主義と奴隸制度の間に関係性を見出すことによって民主主義が分断を生み出してきていることを指摘する。そしてこうした民主主義の暴力を覆い隠すために疑似的な神話が用いられ、こうした神話を成り立たせる代償は、「暴力を植民地あるいは、今日の収容所、監獄などの第三の場所、すなわち、非場所へと外在化させることである」(p.34)と述べる。同時に、民主主義はこうした第三の場から生じる暴力を恐れており、そうした恐怖が信じられることによって、一つの真実と化すのである。すなわち、収容所や監獄といった場所に収容されている人々は敵であり、脅威であると信じられる。上記のような思い込みによって生じる戦争が惑星規模で起こっており、こうした状況の改善のために我々は地球という惑星に棲む共通の存在であるという信念のもと、「惑星民主主義<sup>(3)</sup>」(p.40)の実現が必要であると主張する。

第2章「敵意の社会(The Society of Enmity)」では第1章に続いて、民主主義が分断を生み出していることを念頭に置きながら、こうした民主主義が「敵への欲望」、「アパルトヘイト(分離と囲い込み)への欲望」、「絶滅への幻想」(p.43)によって構成されていることを指摘する。これらの欲望ないし幻想によって、壁や検問所、監視塔などの境界線は生みだされており、その最も顕著な例としてイスラエルによるパレスチナ自治区の占領を挙げる。そこで行われる暴力はそれまでに行われてきた暴力と比較してハイテク化しており、精密になっている。また、こうしたハイテク化は集団監視の技術にも結びつくことで、自らを脅かす敵をつくりあげた。ムベンベに言わせれば、「過去にはシュミットやハイデガーが言うように敵を見つけ、表に

出すことが基本的な要求であったとするならば、今日では、敵を作り出し、敵に立ち向かい、敵の完全な消滅と破壊の予感に直面させればよい」(p. 64) のである。

表題にもなっている第3章「ネクロポリティクス (Necropolitics)」では「死政治」の概念を用いることによって、ミシェル・フーコーやジョルジオ・アガンベの生権力論を乗り越え、より議論を発展させる。そして、ムベンベは「死政治」が働いている場として、またもイスラエルによるパレスチナ自治区の占領を例に挙げる。そうした状況においては自らの死が他者の死と結びつく「殉教の論理」が働いており、この論理は「抵抗と自殺、犠牲と贖罪、殉教と自由の境界線を曖昧にする」(p. 92) のである。

第4章「物体性 (Viscerality)」では主にテクノロジーに焦点があてられており、計算機器の出現によってもたらされる課題に対する技術批判や理性批判の必要性を説く。計算機器の出現はすべての人間、生物を客觀化できるようになったことを意味しており、そこでは「資本による政治的なものの抹殺が眞の脅威である」(p. 116) という。こうした脅威に立ち向かうために政治的な生を生み出すことが21世紀の問題となるというのである。

第5章「ファンの薬学 (Fanon's Pharmacy)」はムベンベにおけるフランス・ファン論として見ることができる。ムベンベはファンが看た患者を通して、女性が戦争において、過剰な存在となっていることを指摘する。ここで過剰とは妻などの自分と近しい女性の死が患者にとって大きなトラウマとなっているような状況を指す。この過剰さによって、母親であったとしても配偶者や姉妹であったとしても、誰が死刑に処せられたのかを知ることはもはや不可能であることを指摘する。それはフランス兵に母親を殺された19歳の民族解放兵士が女性を殺害したときに母のことを思い続けたという事例によって説明される。

第6章「この息苦しい真昼 (This Stifling Noonday)」では、近代において絶対的な指標として機能していたヒューマニズムに対しての批判を行っている。ムベンベは歴史上黒人が動物でもモノでもなかつたことを指摘したうえで、「動物と動物の世界、人間の世界とモノの世界の間のこの宙吊りの生は、いくつかの点で、今もなお現代の法則、つまり経済の法則である」(p. 167) という。ムベンベにとって、経済は採集と収集によって成り立っているものであり、人間と人間以外の関係を基礎づけるものであった。その関係

の中では、人間が時として人間以外を破壊するようなことが起り得たのである。そして、それは現代の経済においても見られる現象である。こうした背景において、ニグロ<sup>(4)</sup>と呼ばれる対象もまた変わりつつある。過去にはアフリカ出身であることや肌の色で判断されていたが、現代は資本にとって使い道のない余剰であれば、誰もがその対象となり得るのである。

### 3. ヒューマニズムの揺らぎと惑星民主主義

ムベンベが本書で取り立てて主張していたのは、テクノロジーの発展に伴ってヒューマニズムが成り立くなっているということであった。こうした議論をムベンベが行っていることは、日本においては紹介されていない。しかし、このことはムベンベの思想を見ていくにあたって非常に重要な視点であると思われる。したがって、本章ではテクノロジーの発展とそれに伴うヒューマニズムの衰退を軸として、ムベンベの議論を追っていく。

ムベンベは、ハイデガー『技術への問い』から西洋において問題となってきた事柄を取り上げる。ムベンベによれば、テクノロジーを妄信することもなければ、テクノロジーに対して反抗することもない自由、すなわち「開かれ」が西洋において問題となってきたと指摘する。しかし、こうした考えは西洋形而上学的な伝統の一部でしかなく、「人間の技術的世界と人間以外の動物の自然的世界との間に区分があることを前提としており、人間を優遇するあまり、動物の間で道具が広く使われていることを都合よく忘れている」(p. 94)。現代はまさにテクノロジーの発展によってヒトとモノの間の境界線が曖昧になっているのであり、我々はもはやハイデガーの時代を生きていない。それは第6章における黒人の例を通して説明されるが、パレスチナにおける「殉教の論理」を通して考えることもできる。殉教の論理を最も示している例として、自爆テロを挙げることができるが、それはまさに身体を兵器へと変える行為である。そしてそれは「犠牲を通して永遠の生を誕生させる」(p. 90) 機能を持つ。それが意味するのは包囲されている場からの死を通した逃亡であり、死を通した自由の獲得である。これこそが「抵抗と自殺、犠牲と贖罪、殉教と自由の境界線を曖昧にする」というムベンベの主張が意味するところである。ヒトとモノの境界線は殉教の論理にも関連

があり、上記の境界線をも曖昧にするのである。

では、こうしたテクノロジーはどのようにしてヒトとモノの境界線を曖昧にするのか。それはあらゆるものを計算可能に、そして客体化可能することによってである。ムベンベはこのことを、ジャック・ラカンが「外密性」と呼んだものと同様のものとして捉えている (p. 114)。ムベンベはマルガリータ・メンデスの議論を参照しつつ、人間や植物、動物のコードが解析され、普及することによって生物学の特許が増加していることを指摘する。こうした動きは「生が開放的で非線形で指数関数的にカオス的なシステムであるかもしれないという考えは、ますます過去のものとなりつつある」(p.96) ことを示している。したがって、生は計算可能な対象へとなり、ヒトとモノの境界線は曖昧となるのである。そこでは、テクノロジーが鏡の役割を果たすことによって、「ついに、われわれ自身のスペクタクル、われわれ自身のシーン、われわれ自身の劇場と観客、さらにはわれわれ自身の大衆になることができる」(p. 114)。それは自らが鏡によって、客体化されるということなのである。

こうした計算は資本主義と結びつくことによって様々な余剰を生み出すことを可能にした。ムベンベによれば、資本主義は「種族、あるいは種（偶然ニグロがその対象となった）を絶えず製造すること」、「あらゆるものを計算し、交換可能な商品に変換しようとする（一般化された交換関係の法則）」、「交換可能な商品としての生の製造を独占しようとする」の3つを推進する (p. 177)。この3つの推進によって、すべてのもの（人間も含む）を商品化し、代替可能なものとした。植民地において、どのようなものも代替可能なものとして捉えた。そして、現代はこうした捉え方が資本主義を通して惑星規模にみられる時代なのである。それ故に、かつては肌の色や出身で判断されたニグロもその定義が変わったのだ。

ヒトとモノの境界線が曖昧になり、あらゆるものが客觀化される世界であるからこそ、ムベンベによる「惑星民主主義」の提示は大きな意味を持つ。ムベンベは次のように言う。「来たるべき民主主義は、「普遍的なもの」と「共通のもの」を明確に区別することに依存する」(p. 40)。ここでの普遍的なものは「既に構成されたものや存在に包含されること」を意味し、共通のものは「私たちが持つ唯一の世界であり、持続可能であるためには、その権利を持つすべての人々、すべての種が共有しなければならない」という考えを

前提とするもの」を意味する（p.40）。すなわち、あらゆるものとの境界線が曖昧になってきている現代において、地球という惑星に棲んでいるということは紛れもなく全てに共通する事項なのである。奴隸制度が裏面にあつた民主主義ではなく、真に「人類に普遍の民主主義」を考えるにあたってはもはや人類だけを対象とする民主主義を考えればよいというものではない。その達成はあらゆる生を対象としてはじめて可能になるということを、われわれは本書を通して知るのである。

#### 4. おわりに

本稿では、ムベンベの主張を重視してその論旨を見てきたが、ここでの紹介はほんの一部でしかない。ムベンベの議論はより深い洞察の下、かつより複雑に絡み合っている。こうした複雑さは先述したように、ムベンベの議論がパラレルに行われていることが一因となっている。しかし、言い換えれば、それはある議論に対して様々な側面が提示されていることを意味する。そのため、これから本書を読む読者はとりあえず読み進めることをお勧めする。というのは、最初は分からなくとも多様な側面を見ることでぼんやりながら輪郭が見えてくるためである。また、本書の議論では多くの哲学者・思想家が言及されている。本稿でもハイデガー、ファン、フーコー、アガンベン、ラカンの名前には言及したものの、それはほんの一握りでしかない。他にも、セザール、グリッサン、ヘーゲル、バタイユ、ドゥルーズ＝ガタリ、トクヴィル、デュボイスなど、枚挙に暇がない。多くの思想家を参照しながら進められる議論は非常に難解であるが、本稿で評者自身不安を感じながらも、議論の指標はある程度示したつもりである。本書を読む際に本稿が少しづかりでも助けとなることを願っている。

#### 注

- (1) 本来ならば、仏語版である *politiques de l'inimitié* が参考されるべきであろう。しかし、英語版である *Necropolitics* はアシル・ムベンベも編集にかかわっている *Theory in forms* シリーズの1冊として出版されており、その中で、英語版は仏語版に収録されていなかった2つの論文（第3章、第4章）が追加されてい

る。このことが意味するのは、英語版は仏語版の増補版として出版されたということである。本稿が英語版を扱うのはこうした事情による。

- (2) 以下、*Necropolitics* から引用・参照する場合は () 内に頁数を表記する形で示す。
- (3) この用語は「普遍的呼吸権」、すなわち、「生きとし生けるものあらゆるもの普遍性にかかる權利」（ムベンベ 2020:229）とも一致するものである。
- (4) ニグロは本来差別用語であるが、ムベンベがあえて用いている用語であるため、そのまま表記した。以降の記述も同様の理由である。

## 参照文献

ムベンベ、アシル（2020）「普遍的呼吸権」箱田徹訳、『現代思想』48（10）：224-23  
——（2005）「ネクロポリティクス」小田原琳・古川高子訳、『クファ ドランテ』7: 11-  
42。